

崔 応天 (芸術学)

韓国の梵音具に関する研究

本研究は、前近代の朝鮮半島において約 1300 年間にわたって制作された梵音具の中で、金属工芸に分類される梵鐘・金鼓を中心に雲板を加えた諸作例について、その起源、成立、展開をはじめ総合的に明らかにするものである。当該分野の研究は、坪井良平らを代表とする近代の日本人研究者によって、日本伝来の梵鐘を中心にその基礎が確立されてきたが、本研究は、これらの学術成果に立脚しながら、朝鮮戦争以後、韓国各地から出土した新資料や韓国国内及び北朝鮮所在の遺品、さらに朝鮮時代の梵鐘に至るまで広く研究対象を拡大し、実作品の網羅的な調査にもとづいて各梵音具の鑄造方法の復元、形態の分類、銘文の判読、鑄金匠人の活動等を総合的に考察し、前近代の朝鮮半島における梵音具の様式変化と編年をはじめ提示した点で、画期的な意義を有する労作となっている。

本研究は、とりわけ考察の中心となる梵鐘の様式変化について、朝鮮半島において規範とされた二つの主要な典型の成立と交替、表面意匠の増減という観点から考察し、統一新羅時代に制作された現存する最古の上院寺鐘（725 年銘）において、早くに規範的な典型が成立し、その規範性が伝統として 13 世紀の高麗時代後期まで継承されていること、元の支配が強まる 14 世紀頃から、元から流入した梵鐘の形式が新たな典型となって流布すること、さらに朝鮮時代では、統一新羅鐘と元鐘という先行する二つの規範的な典型が相互に干渉しつつ、一見、多様性をみせる梵鐘形態に主要な要因として受容されていることを明快に提示する。また各時代の鑄金匠人の動向にはじめて総合的な考察を加えることで、制作集団の伝承する技術と意匠とが、伝統の維持に大きな影響力があったことを論述している。とりわけ、高麗後期に主要な典型が交替した点について、その理由を単に作品に外在する文化的環境の変化にもとめず、梵鐘の様式変化が鑄金技術の変化と密接に結びつくという観点から検証を行い、上述した変革が 40 年間に及ぶ対蒙古との抗争期に、典型となる梵鐘の喪失と技術者集団の崩壊に起因するという論点は、本研究の卓越した洞察力を示す一例となっている。本研究が提示する様式史とそれに基づく編年は、さらに梵鐘の表面意匠と同時代の絵画資料等との詳細な比較検討によって補強され、時代相を反映した説得力のあるものとなっている。

梵鐘研究に特色づけられる本研究の研究手法と実証性は、金鼓や雲板の考察でも一貫され、従来の研究をはるかに凌駕する総合的かつ網羅的な研究成果を公にしている。本論に付された作品目録、銘文資料も、今日、望みうる最も信頼性の高い基礎資料となっており、当該領域の研究の基礎資料としても意義深い。

本研究は、朝鮮半島における前近代の長期にわたる造形上の様式変遷を明らかにしたことで、自から遺品の少ない建築・彫刻・絵画等の他の美術ジャンルにおける造形上の様式変化に関する考察を補完し、また東アジア世界における造形史に対しても、確かな一つの道筋を明示する点で、きわめて優れた業績として、高く評価を受けるに値する。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。